# Ⅱ－1　北京・崇貞学園　崇貞学園時代

## 1920年代の崇貞学園

清水安三・美穂夫妻が1921年5月に設立した学校は、下記の「崇貞学校報告」が示すように崇貞学校であるが、崇貞工読学校とも称した（『崇貞学園一覧』1936年）ようである。『基督教世界』（1924年8月14日）には、設立後3年を迎えた「崇貞女学校」の写真が大きく掲載されている。1930年代後半からは崇貞学園が正式名称となった（以下の説明では、崇貞学園と記す）。「工読」は「且（か）つ工し且つ読む」であって、刺繍などを教えて女子児童に自活の道を教えようとしたもので、この学校の大きな特色であった。

学校設立初期における中山龍次の尽力、多額の寄付をした田村新吉など、学校の存続という観点から、その名を逸することはできない。また、清水夫妻は1924年から26年の2年余り米国に留学、27年8月から33年5月まで安三はほぼ日本で仕事をしていた。1927年以降の留守の間、学校の世話を、矢野春隆（三菱公司）、伊東豊作（北平日本居留民会常務委員・歯科医師）に委託した。

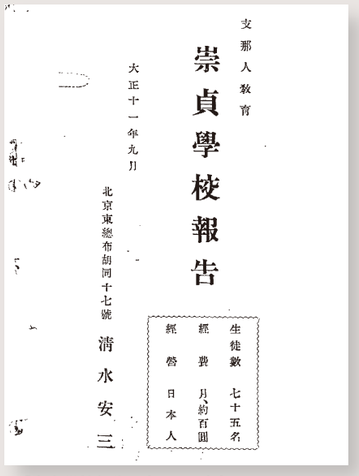
ただ、1920年代の学校内部のことは資料にとぼしく、必ずしも明瞭になっていないところも少なくない。

### 崇貞学校報告（大正十一年九月）

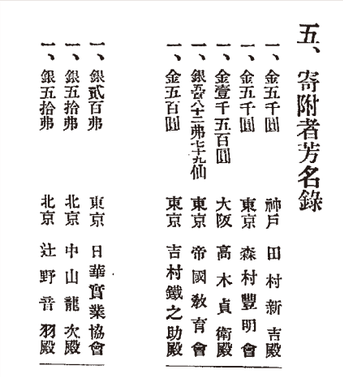
「崇貞学校報告」（アジア歴史資料センター資料）は、創設間もない崇貞学園の内実をうかがうことのできる数少ない同時代資料の一つである。学校名は「崇貞学校」、生徒数は75名とある。

この「報告」は、まず「早災飢饉救済」活動に参加して以来の学校設立の経緯を述べ、次に会計報告・敷地購入費会計報告・校舎建設資金・寄附者芳名録を掲載し、ほどなく校舎を建築する予定だったが、中国当局との交渉が難航し、延期したと報告する。校舎建築・移転は1931年まで持ち越される結果となった。

校地購入費には、高木貞衛からの寄付が充てられた。「寄附者芳名録」には、大口寄付者として田村新吉、森村豊明会の名前のほか、「北京北支旱災救済会委員中山龍次」の役割が特筆されているが、寄付者には、この「旱災救済」活動に加わった人びとも多い。


支那人教育
崇貞學校報告
大正十一年九月
北京東總布胡同十七號
清水安三
生徒數　七十五名
經費　月約百圓
經營　日本人

■「崇貞学校報告」（1922年）
設立1年後の学校報告の冒頭。
（B05015394200、アジア歴史資料センター提供／外務省外交史料館所蔵）

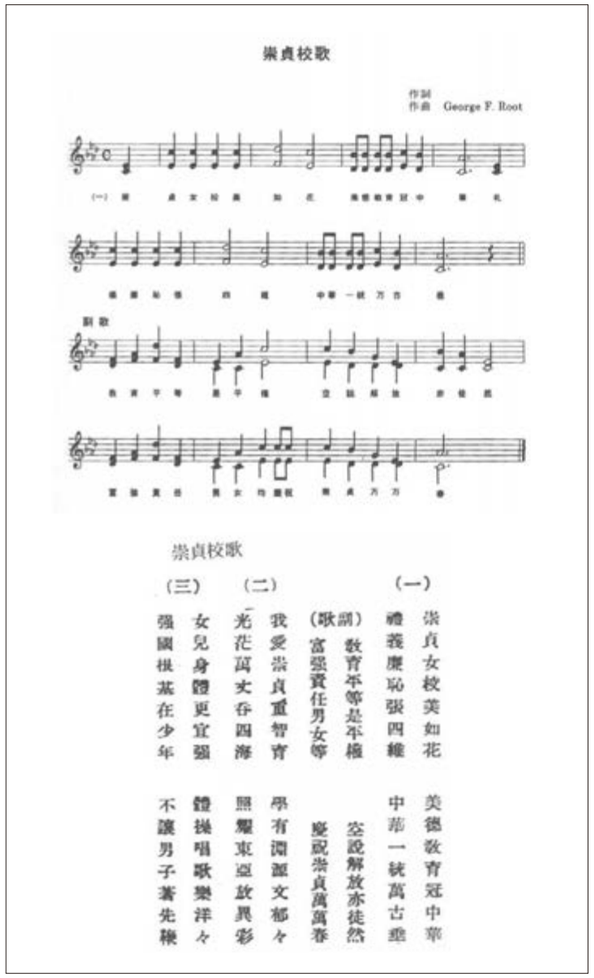

五、寄附者芳名録
一、金五千圓　神戸　田村新吉殿
一、金五千圓　東京　森村豐明會
一、金壹千五百圓　大阪　高木貞衛殿
一、銀壹千三百三十九圓　東京　帝國教育會
一、金五百圓　東京　吉村鐵之助殿
一、銀貳百弗　東京　日華實業協會
一、銀五拾弗　北京　中山龍次殿
一、銀五拾弗　北京　辻野晉羽殿

■「寄附者芳名録」から

■学校設立に協力した中山龍次
中山は、当時は中華民国交通部顧問。後にはNHK常務理事、十日町市長など。

■学校初期の生徒・教員（1924年頃か）
背景に「崇貞学校」の旗。右端が清水安三、前列左端帽子の女性が美穂夫人。その後ろは中山龍次か。2列目中ほどが教員の羅俊英と賈和光か。

■クリスマス行事に掲揚された「崇貞学校」旗（1920年代）
「慶祝基督聖誕」と書かれ、校旗と中華民国国旗が並んで掲揚されている。


崇貞校歌
作詞
作曲　George F. Root
副歌
崇貞校歌
（一）
崇貞女校美如花
禮義廉恥張四維
（歌詞）教育平等是平權
富强責任男女等
美德教育冠中華
中華一統萬古垂
（二）
我愛崇貞重智育
光花萬丈吞四海
學有淵源文都々
無窮東亞放異彩
空設解放亦徒然
慶祝崇貞萬萬春
（三）
女兒身體更宜强
强國根基在少年
體操唱歌樂洋々
不讓男子著先鞭

■『基督教世界』1面に大きく掲載
大正13（1924）年8月14日（2123号）。この週刊新聞の主たる読者であった日本組合基督教会の人びとは、この新聞から以下のことを記憶にとどめたであろう。
・学校名は「崇貞女学校」。
・写真下「目次」の「写真　崇貞女学校創立三年記念」から、創立時期は1921年。
・写真下の「北京にて清水安三氏の経営せるもの」から、学校所在地と経営者名。

■崇貞校歌（中国語）歌詞
『崇貞学園一覧』（『支那之友』特別号、1936年10月）の「校名と校歌」欄（郁子筆）に崇貞の校歌歌詞が紹介されている。それによれば、作詞は安三と賈和光（崇貞教員）。第一節は美育徳育の奨励、第二節は知育提唱、第三節は体育の高調、副歌（折り返し）は「男女平等、男女連帯」を歌うとする。この校歌の成立は学校設立当時の世界的なデモクラシー高唱の時代。「スラムの町から、こうした声が挙げられた事は全く驚異に値する」というが、郁子は作曲者にはふれていない。桜井萌の調査報告（『清水安三・郁子研究』創刊号所収）によれば、中国語の崇貞校歌には既存の曲（George F. Root作曲）を借用したもののようである。
（歌詞は「崇貞学園一覧」（1936年）、楽譜は上記の桜井報告による）

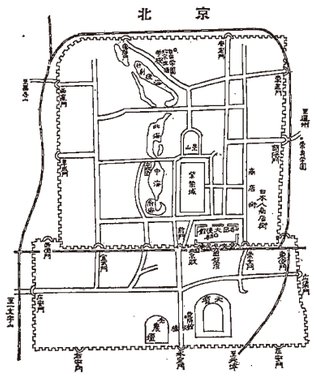
# Ⅱ－1　北京・崇貞学園 崇貞学園時代

## 1930年代初頭の学園

清水夫妻が学校を設立した当初は、「災童収容所」施設を利用できたが、1921年秋には、学校の場所を移した。高木貞衛の寄付金によって校地を確保したものの、北京当局からの建築許可がおりないでいた。だが、やがて建築許可が出て、校舎を建築し1931年春に移転した。移転先が朝陽門外芳草地であり、その場所で次第に校地も拡張し、校舎も増築していく。こうした点は、アジア歴史資料センター（アジ歴）資料に含まれる『崇貞女学校概要』（1931年初頭印刷と推定）などにうかがうことができる。

1927年から33年春まで、清水は主に京都で学校の運営資金調達につとめた。それが、近江兄弟社の北京駐在員という役割を得て、1933年春北京に戻ることが可能になった。そこには、ヴォーリズや吉田悦蔵との人脈が作用したといえる（次頁下段「近江兄弟社との交流」を示す写真参照）。1931年の学校移転に際しては、刺繍の指導にあたった美穂夫人の功績が実に大きかった。

■新校舎に移転（1931年）
芳草地に移転直後の校内。
（*The Omi Mustard Seed*, June-July, 1931 掲載）




■北京地図
中央に紫禁城、その右上方向に「崇貞学園」とある。ただし、崇貞学園の位置を補正。
（『女子教育』1940年6月号）

■通州大街（学園付近）
朝陽門は通州につながる場所に位置していた。
（『朝陽門外』グラビアから）

■新築十周年記念館
1931年初頭に印刷された『崇貞女学校概要』に所収。学校所在地がまだ「神路街」となっている。その直後に移転。背後に「崇貞学校」旗が見える。
（B05015856100、アジア歴史資料センター提供／外務省外交史料館所蔵）

■1931年の校舎移転時に建てられた校舎
1931年初めの『崇貞女学校概要』中の「新築計画図」に出てくる校舎である。

■新築十周年記念館での刺繍作業（1931年頃）
（『崇貞学園一覧』1936年／桜美林大学図書館所蔵（複製物）。原本は東京大学東洋文化研究所図書室所蔵）

■崇貞学園生徒の刺繍（1930年代か）
崇貞では、刺繍は教育の重要な要素であり、その売上げ金の一部は校舎建築費に充てられた。
（『姑娘の父母』グラビアから）

Pupils and faculty of Mr. Shimizu's School for Chinese Girls, outside East Gate, Peiping, China

■近江兄弟社との交流（1931年4月4日）
朝陽門外芳草地への移転直後の崇貞女学校を訪問したヴォーリズたちと児童たち。最後列右から数人目の長身が近江兄弟社の吉田悦蔵（清水の親友）、その隣が清水。1人おいてヴォーリズ。吉田の右下の帽子姿が美穂か。
（*The Omi Mustard Seed*, 前掲号）

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園　崇貞学園時代

## 崇貞女学校から崇貞学園へ

1931年、学校は記念館と校舎２棟を建築して移転した。それには手工業教育などによる美穂の多大な尽力があった。安三とともに中国の女子児童のために、崇貞学園発展のために尽くした美穂夫人は、1933年に亡くなった。

安三は1935年７月７日、天津教会で郁子と結婚式をあげる。翌年、学校は建築物を７棟に増やした。それとともに、学校設立期以来の「工読」（Labor and Learning）を基盤に、教育理念も明確化させた。

下に示してある「崇貞女学校概要」（1935年頃）には、「工読教育」（刺繍などの手工芸教育を通じて女子に自活の道を開く）、「社会奉仕」、「家族主義」（卒業生も含め、神を父とし、家族のように事業に協力する）の３つが掲げられ、「崇貞学園一覧」（『支那之友』特別号、1936年10月）には、「工且読書」「学而事人」の２つが挙げられている。「事人」とは、たんに人に事（つか）えるというだけでなく、人に奉仕し、「朝陽門外の村を改造する社会運動となるべきだ」とも位置づけられていた。

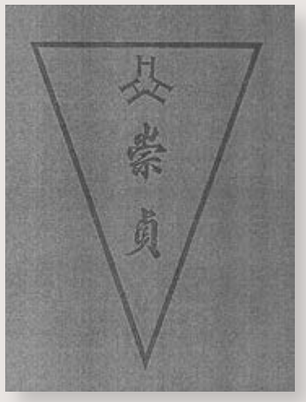
崇貞女學校
概要
支那人教育
支那人傳道
セツルメント
（地在所）
北平朝陽門外
振替大連六三九二番

■「崇貞女学校概要」冒頭（1935年頃）
冒頭に「支那人教育」「支那人伝道」「セツルメント」とある。当時北京は北平ともいわれていた。

### 学校の理念と3H主義

「崇貞学園一覧」で説かれた「工且読書」の「工」には、Heart･Head･Handの訓練が肝要だとする考え（3H主義）が説かれた。（この3Hをデザイン化したバッジなども製作されていた。）

この「一覧」には、英文･中国文の部分があり、英文部分には、Internationalism is the one big feature of our school. などとある。また「崇貞女校簡章」には、「宗旨」として「本校願望養成適合新時代之女子」、「教育方針」として「互助愛校愛国愛人類之精神」などの文字が見える。




■崇貞の3H図案化マーク
『崇貞学園一覧』中の英文説明冒頭に掲げられたデザイン。

■崇貞学園バッジ
判読困難であるが、左図の図案が使用されていたのであろう。

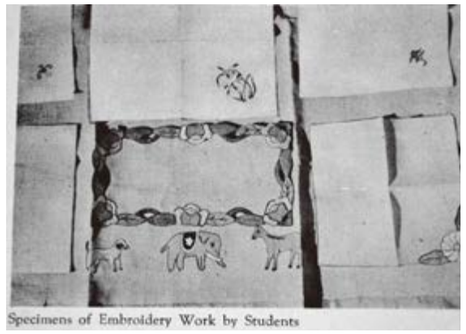
■『崇貞学園一覧』表紙
この「一覧」では、当時の学校の様子を示す写真も10葉余り収録。
（桜美林大学図書館所蔵（複製物）。原本は東京大学東洋文化研究所図書室所蔵）

■崇貞学園の子どもたち（1930年代半ばか）
背景に孫文の写真、向かって右に中華民国の国旗、左に国民党の党旗、その下に崇貞学園旗が見える。

■新築校舎及び講堂
1935年頃の竣工。崇貞学園の校舎は、1930年代に次つぎと新築された。

■学園内・美穂の墓のそばの「刺繍の家」
「刺繍の家」が園内に設置されていたことがうかがえる。「旧校舎」が「刺繍の家」に転用されたか。前に見えるのは美穂の墓石。
（『大陸の聖女』グラビアから）

■新校舎正面
1935年頃に竣工と推定。1930−31年竣工の校舎が「旧校舎」。
（上泉秀信『愛の建設者』英訳本から）




■刺繍の見本
刺繍製作は、女生徒の経済的自立をうながす教育の一環であったが、その販売による収益の一部は学園の資金にもなった。
（『愛の建設者』英訳本から）

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園 崇貞学園時代

## 学園の諸相

崇貞学園の学園紙として、『支那之友』が刊行されていた。創刊は1935年8月（『昭和十二年日本組合教会便覧』）。ただし、第60号（1944年4月20日）までのうち、半数ほどしか残存の確認ができていない。執筆者は主に安三と郁子。論説や崇貞学園の現況報告などを掲載している。『支那之友』には、ほぼ毎号「崇貞学園寄附者芳名録」が掲載された。ここに掲げた第46号の例では、2円という小口から5,000円という大口（大原孫三郎5,000円、森村豊明会1,000円など）までが見える。

学校も充実の度を加えた。たとえば、1938年9月からは中学部ができ、同時期には小学部に男子児童が入学するようになった。「崇貞中学」などの看板は、その時期のものと推定される。他方、「崇貞女学校」という看板が写った写真も残る。

学校の充実・寄付の広がりなどに伴い、崇貞学園の名前が日本国内にも知られて、たとえば作家 林芙美子など、日本からの訪問者もあった。

### 学校の看板について

崇貞学園は、日本の外務省を通じて補助金などを受給していたが、学校は北京にあり、その児童・生徒は中国人であるので、学制などは中国側当局の管轄下にあった。この頁に見える学校の看板が「北京市私立崇貞小学」「北京市私立崇貞中学」「崇貞女学校」となっているのは、そうした事情によるものだといえよう。

■崇貞小学校門前（1930年代後半か）

■崇貞中学校門（1941−42年頃）
この門が学園の正門にあたる。

■崇貞女学校の看板前の女学生たち（時期不明）

■林芙美子の崇貞女学校紹介
林の「北京紀行」（1936年）には、崇貞女学校訪問記が書かれた。写真は現行の文庫本。

■『支那之友』掲載の「崇貞学園寄附者芳名録」
『支那之友』には、ほぼ毎号、「崇貞学園寄附者芳名録」が掲載された。この号の発行年の2600年（皇紀）は、1940年にあたる。

■安三・郁子が主に執筆した『支那之友』
『支那之友』は、日本国内の崇貞学園支持者に郵送されていた。頁と頁の間の余白にも寄付者名を掲載することが多かった。

■崇貞学園寄付者 山岡春
山岡春（1866−64）は大阪・岸和田の婦人運動指導者。地域の婦人たちと崇貞学園への寄付金を継続した。『支那之友』バックナンバーの保存にもつとめた。
（山岡家所蔵／岸和田市教育委員会提供）

■朝陽門外の貧民への施米に活躍する学生たち（1930年代後半か）
崇貞学園内にて。

■学園内の子どもたち（1930年代後半か）
男子生徒の姿もみえる。男子入学は1938年秋から。

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園　崇貞学園時代

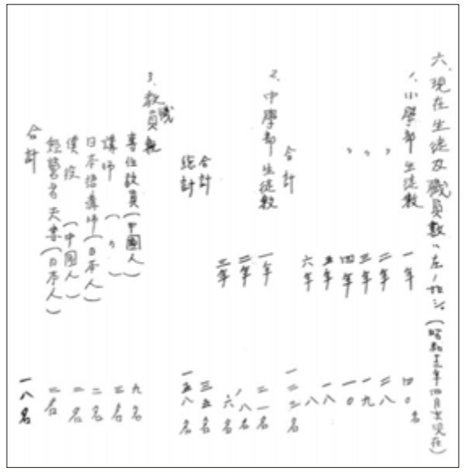
## 1930年代後半 学園の発展

崇貞学園生徒数は、年次ごとの統計の確認できない年もあり、部分的なことしか判明しない。

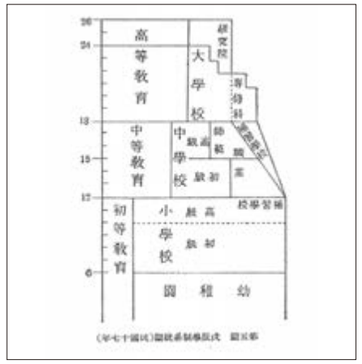
『崇貞学校報告（大正十一年）』によれば、1921年5月開校時の生徒数50名、22年9月新学期の生徒数75名。『崇貞女学校概要（1931年初頭作成か）』*では、1931年初めの生徒数100名、開校以来の入学者数500余名とある。

1930年代後半の生徒数はアジ歴資料により、それ以降は部分的には『支那之友』により概略を把握できるが、ここではその資料の一部を例示するにとどめる。1935年、39年には校舎などの増築があった。中学も整備され、日本人部も併設されて、生徒数も増加し、崇貞学園は発展していく。生徒数については、本書年表の若干の項目にも記載してある。

1939年は学園の建築ラッシュの年で、体育館（3年計画で建築）などが建てられ、グラウンドも整備された。安三・郁子夫妻の観戦写真（次頁）は、おそらくその頃のものであろう。



■ **生徒数・教職員数（1938年4月末現在）**
中国人部入学時期は9月。
（B05015857800、アジア歴史資料センター提供／外務省外交史料館所蔵）




■ **1922年の中華民国学制**
「崇貞学園」は北京にあったから、中国の教育部（文科省に相当）が五四運動後の1922年に定めた学制に従うところがあった。
（陳青之『近代支那教育史』、柳沢三郎訳、生活社、1939年）

■ **教室風景（時期不詳）**

■ **校庭で（時期不詳）**

＊『崇貞女学校概要』：B05015856100、アジア歴史資料センター提供／外務省外交史料館所蔵



■ **図書館**
1930年代末の建築。

■ **図書室内の様子（1930年代末）**
上泉秀信『愛の建設者』英訳本所収。

■ **体育祭を観戦する安三・郁子夫妻（1930年代後半か）**
1939年、40年と崇貞学園の施設・校舎は充実する。グラウンドなども整備された。

■ **体育館の前で（1939年頃）**
体育館は3年計画で建設された。桜美林学園・町田キャンパスの「更賜体育館」「又賜体育館」の名は、崇貞学園に賜った体育館の延長線上にあるという意識に由来する。

■ **体育祭での「崇」の文字**
体育祭で「崇貞」の人文字が作られた。

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園 崇貞学園時代

## 日本への留学生たち

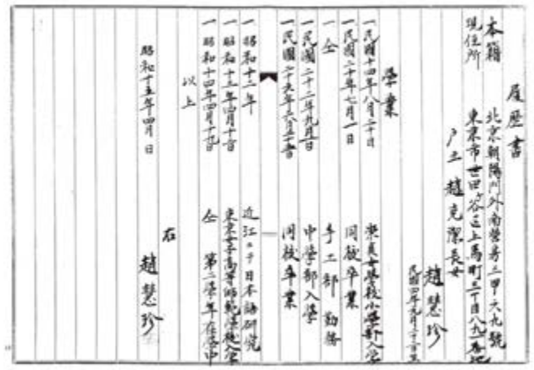
1920年代に崇貞女学校での勉学後に、日本に留学した生徒はいた。しかし、崇貞学園卒業生の日本留学が組織化されたのは1938年以降である。次頁に掲げた『読売新聞』の記事はその一端を伝えている。

また、趙慧珍の履歴書（アジ歴資料）は、学園の歴史の一面をも伝えて興味深い。

中華民国14年（1925年）8月、小学部入学で、1931年卒業。中学部入学まで「手工部」で刺繍の製作・指導をしたのであろう。また、趙は中学時代に来日していた時期があったようである。1937年に来日後、近江兄弟社関係の学校で日本語にみがきをかけ、上京。1938年4月に東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）に入学、崇貞学園の用意した「崇貞学寮」に住んだ。崇貞学園の留学生たちが日本の外務省から学費補助を受けていたことが判明する。中国に戻った趙は、その後、崇貞学園の教員・初級中学校長になった。「崇貞学園一覧」に学園の方針として掲げられた「家族主義」の一つの側面を示すものである。

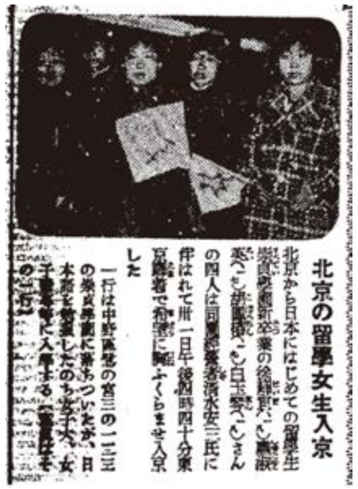
■ **日本語を学習する生徒（時期不詳）**
中国人部でも日本語は教えられていた。

■ **留学生に対する学費補給の願出書（1939年）**
ここに名前がある学生は、徐（1939年9月病没）以外、中国に帰国後は崇貞学園の教員となった。留学先は、東京女子高等師範学校、東京女子大学、東京女子医学専門学校（現 東京女子医科大学）、大妻学校、青山学院と多様であり、日本留学が制度的に整備されていたことがうかがえる。
（B05015508700、アジ歴資料センター提供／外務省外交史料館所蔵）

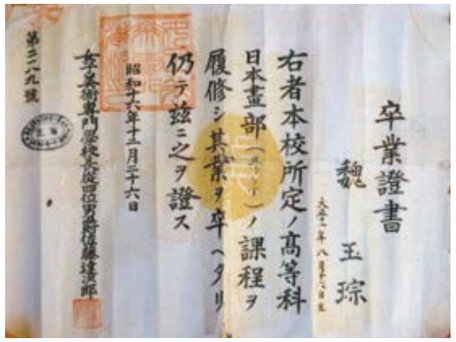


■ **留学生の一人 趙慧珍の履歴書**
この履歴書からは、崇貞学園の制度の次のような点もうかがえる。
・民国4（1925）年当時の学校名は「崇貞女学校小学部」「中学部」。
・入学時期は8月末から9月初旬、卒業時期は6月末から7月初旬。
・校内における「手工部」の存在。
（B05015508700、アジ歴資料センター提供／外務省外交史料館所蔵）

■ **近江八幡の吉田悦蔵邸玄関での留学生（1938年）**
前列右は清水安三、その後ろ吉田悦蔵とその夫人。前の方の4人が崇貞からの女子学生で、右上の『読売新聞』記事にその名前が見える。なお、吉田邸（現存）はヴォーリズの設計による。




■ **北京の留学女生入京**
北京・崇貞学園の留学生を報じる新聞。東京の中野区に寮があったことが記事からうかがえる。
（『読売新聞』1938年4月1日付朝刊）




■ **日本に留学した魏玉琮と卒業証書**
卒業証書は1941年12月26日付。右の写真は、2015年10月31日、魏宅にて。当時94歳。『清水安三・郁子研究』第8号参照。

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園　崇貞学園時代

## 日本人部の誕生

崇貞学園は、貧困の淵に沈む中国人女子児童の手に技術を付与することをめざして設立された経緯からわかる通り、もともと中国人生徒を対象とする学校であった。しかし、時代の経過とともに中国社会も変貌し、中学部を設置して生徒の進学の条件も整えるようになった。また、日中戦争開始（1937年７月）以降には、北京の日本人数増加も顕著になったことを一つの背景に、1939年４月に崇貞学園に日本女子中学部（日本人部）がスタートした。『支那之友』第37号では、日本人部の設置は「日支親善」「日支合作」の方針に沿うものだとしている。

日本人部には朝鮮人も入学してきた。最初の入学生のひとり玄次俊などが戦後に回想するところでは、清水は「創氏改名」政策後でも朝鮮人生徒が本名を使うようにうながし、朝鮮語学習をするよう励ましたという。さらには、朝鮮の国花はムクゲであるとか、朝鮮の独立運動が存続していることまで示唆していたという。戦後に韓国に戻った崇貞卒業生たちは、同窓会の開催を続けた（44頁参照）。

崇貞學園日本女子中學部案内

（別掲崇貞學園概要參照）

名稱　崇貞學園日本女子中學部と稱す

所在地　北京朝陽門外芳草地崇貞學園内

本學園は北京の東郊、空氣清澄にして閑靜なる地帶にあり、約八千坪の校地に支那式校舍五棟、鐵筋コンクリート校舍四棟（内三棟は目下建築中）外に寄宿舍として、支那式家屋十五棟を擁す

目的　現地に於ける日本子女のため、現代家庭婦人としての必須なる教養を授くると共に、支那語及支那事情に通ぜしめ且つ中國子女との共學により相互の理解を高め、以て文化的中日合作のために有爲なる女性たらしめむことを期す

修業年限　三ヶ年とし、一學年を前後二期に分ち、前期は四月十一日より十月二十日まで、後期は十一月一日より三月十五日までとす

入學資格　日本語常小學校卒業者及之程度の學力を有する者を入學試驗により採用す

募集人員　第一學年　三十五名　寄宿生二十名

■ **日本女子中学部を創設、その生徒募集案内**
修学年限は３年。４月開始の前期、11月開始の後期の２期制。
（『支那之友』第37号、1939年３月５日／同志社大学神学部提供）

■ **日本人部の生徒たち（1940年頃）**

■ **学園の兵隊さん慰問**
（『姑娘の父母』グラビアから）

### 日本人部の教員と担当学科など

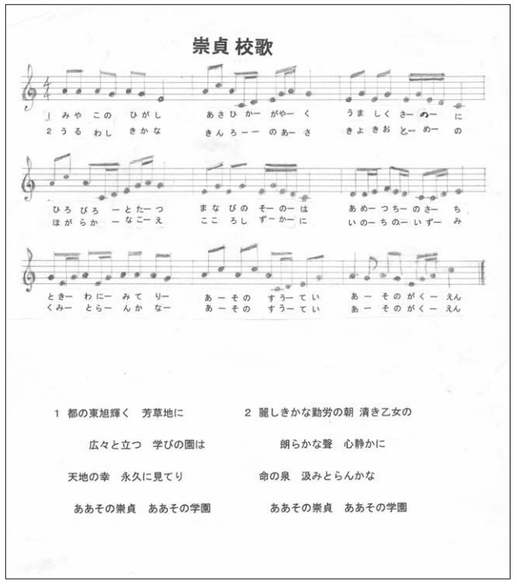
この頁の「教職員及受持学科」（『支那之友』第37号）は日本人部の、41頁の「中学校職教員一覧表」（北京・档案館資料）は中国人部の一覧である。崇貞学園は創立以来中国人生徒のための学校であった。それが1939年４月「日本人部」の設置とともに、日本人教員が配置された。教員一覧に担当科目が記載されているので、カリキュラムについてある程度のことは理解可能であろう。

教職員及受持學科

■ **日本人部の教員には日本人が多かった**
（『支那之友』第37号、1939年３月５日／同志社大学神学部提供）

■ **日本人部生徒写真（1940年頃）**
崇貞学園を訪問した河井道（恵泉女学園創設者）と日本人部の生徒たち。後列中央に河井、前列左から２人目が清水。
（『木槿の花の咲く頃』から）

■ **日本人部２・３年生の「大陸旅行」（1942年３月）**
この旅行は、日本人部第１回卒業式直前の春に実施。上海・虹口公園（現在は魯迅公園）で。後列中央に清水安三。



崇貞 校歌

1 みや この ひがし　あさひ かー がやー く　うま しく さー のー に
2 うる わし きかな　きんろー ーの あー さ　きよ きお とー めー の

ひろ びろ ーと たー つ　まな びの そー のー は　あめー つち ーの さー ち
ほが らか ーな こー え　ここ ろし ずー かー に　いの ー ち のー いず ー み

とき ー わに ー みて り ー　あー その すー てい　あー その がく ー えん
くみ ー とら ー んか な ー　あー その すー てい　あー その がく ー えん

1 都の東旭輝く　芳草地に　　2 麗しきかな勤労の朝　清き乙女の
広々と立つ　学びの園は　　朗らかな聲　心静かに
天地の幸　永久に見てり　　命の泉　汲みとらんかな
ああその崇貞　ああその学園　　ああその崇貞　ああその学園

■ **崇貞校歌**
日本語校歌の作詞者は吉田悦蔵、作曲者不詳。日本語校歌の成立の前提には、日本人部の誕生があった（中国語校歌は25頁）。
（『清水安三・郁子研究』創刊号所収、桜井萌論考から）

■ **寄宿舎の門（1930年代末か）**
（『姑娘の父母』グラビアから）

■ **朝鮮服を着た清水夫妻**
日本人部に朝鮮人生徒もいたことと関連する服装。

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園 崇貞学園時代

## セツルメント天橋愛隣館――第二の崇貞学園をめざして

天橋愛隣館は、日本基督教連盟時局奉仕婦人委員会の事業として設立されたセツルメントである。武力ではなく、愛の行為による平和を実現すべきとする久布白落実（「内地委員会」委員長）と林歌子（募金委員長）が中心となり、キリスト教諸教派の婦人部を巻き込み、清水安三を顧問に迎え、1938年には具体的な計画に着手した。天橋愛隣館は、「支那貧民のため」、「支那人のため」、「支那のため」をモットーに、北京の貧民窟・天橋に建設された。1939年1月の「愛隣館医院」の開設に始まり、「授産部」、「学校部」、寄付された日用雑貨を廉価販売する「慈商部」などの事業活動に加え、無料で使用できる井戸を設置した。発足当初から、安三は館長、郁子は現地委員会委員長とし運営に参与したが、日本人スタッフの帰国後、安三、郁子が経営を全面的に担った。愛隣館は、1944年に崇貞学園の所有となり、45年に接収されたが、建物自体は90年頃まで存在していた。

■ **愛隣館の設立・運営を担った委員たち（1939年5月10日頃）**
左より4人目清水郁子、右隣り久布白落実、1人おいて海老名みや、池永英子（愛隣館医師）、林歌子他。献堂式（5月10日）に集った「内地」「現地」委員たちが合同会議を持った時の撮影と推測される。
（公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会提供）

■ **愛隣館外観**
2階建、1階は医務室、待合室、事務室など、2階は台所、私室など。

■ **愛隣館医院の開扉を待つ人びと**
愛隣館医院は開設当初無料であったが、のち低廉な料金で診察に当たった。

■ **下賜金を受領する館長 清水安三（1941年12月）**
郁子（崇貞学園代表）とともに、興亜院にて御沙汰伝達式に臨んだ。

■ **『愛隣』第5号（1941年12月10日）（部分）**
機関誌『愛隣』は、編集発行 清水安三、発行所 天橋愛隣館。
（山岡春関係文書／山岡家所蔵）

■ **井戸感謝式（1940年11月11日）**
井戸の左が郁子、井戸の右が鳥海道子（事務主事）、右隣が池永英子。毎日多くの市民に利用された。

■ **治療にあたる池永英子医師**
池永は1942年10月まで診療を担当、病気にて帰国。

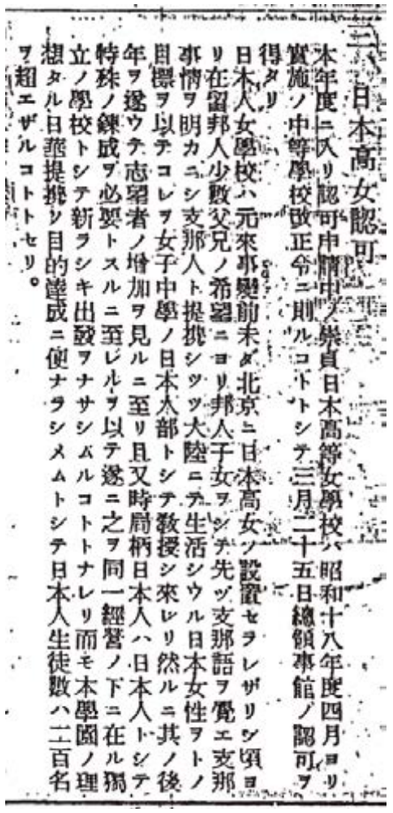
■ **主事鳥海道子の「学校部」での授業風景**
学校部開設は1939年11月。千字学習を中心とした4ヶ月のコース。

■ **授産部で手芸をする婦人たち**
授産部は1939年5月3日開設。付近の婦女子に手工芸品の制作を教え、その出来高に応じて賃金を支払い経済的自立を促した。
（公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会提供）

# Ⅱ－1　北京・崇貞学園 崇貞学園時代

## 1940年代の学園の発展と接収

創立20周年を過ぎた崇貞学園は、1941年12月、愛隣館とともに下賜金を受領した。1942年3月日本人部の第1回卒業式を挙行、43年からは「日本高等女学校」の認可がおり、順調に発展していた。加えて、日本留学を終えた卒業生たちが次々に中国人部の教員に加わり、教員の質的向上が大いに期待できる環境が整いつつあった。『支那之友』（60号）掲載の「42年度事業報告書」中には、年度末小学部生徒総数379名、中学部57名、日本人部71名、教員総数27名とある。学園の事業は広く評価され、朝鮮の李王家より下附金のご沙汰もあった。1943年3月、在南京日本大使館からは、対中国慈善事業の功績が認められ表彰された。加えて、同年同月南京政府主席より褒奨金を寄与された。しかし、敗戦により、崇貞学園は大小22棟の建物と1万4,000坪の敷地、そして愛隣館の土地・建物のすべてを北京政府に接収された。学園継続への安三、郁子のあらゆる努力も効を奏すことはなかった。


日本高女認可
本年度ニ入リ認可申請中ノ崇貞日本高等女學校ハ昭和十八年度四月ヨリ實施ノ中等學校設正令ニ則ルコトトシテ三月二十五日總領事館ノ認可ヲ得タリ、
日本人女學校ハ元來事變前未ダ北京ニ日本高女ノ設置セラレザリシ頃ヨリ在留邦人少數父兄ノ希望ニヨリ邦人子女ヲシテ先ヅ支那語ヲ覺エ支那事情ヲ明カニシ支那人ト提携シツツ大陸ニテ生活シウル日本女性ヲトノ目標ヲ以テコレヲ女子中學ノ日本人部トシテ教授シ來レリ然ルニ其ノ後年ヲ逐ウテ志望者ノ增加ヲ見ルニ至リ且又時局柄日本人ハ日本人トシテ特殊ノ練成ヲ必要トスルニ至レルヲ以テ遂ニ之ヲ同一經營ノ下ニ在ル獨立ノ學校トシテ新ラシキ出發ヲナサシムルコトトナレリ而モ本學園ノ理想タル日華提携ノ目的達成ニ便ナラシメムトシテ日本人生徒數ハ二百名ヲ超エザルコトトセリ。

■「昭和十七年度事業報告書」中「日本高女認可」の記事（『支那の友』第60号、1944年4月20日）
39年日本人中学部として発足したが、43年に日本高等女学校として認可された。
（山岡春関係文書／山岡家所蔵）

■崇貞学園を代表して下賜金を受領する郁子（1941年12月）
安三（愛隣館代表）とともに、興亜院にて御沙汰伝達式に臨んだ。

■崇貞日本高等女学校第1期生卒業式（1942年3月）
前列右から安三、郁子、佐藤道子（音楽担当）、星子（安三娘）。日本人部には、当時中国に在住していた朝鮮人の生徒が多く在学していた。

■女子初級中学（中国人部）卒業式（1944年6月）
前列右から4人目郁子、1人おいて安三、羅俊英。「民國三十三年」は1944年。

■中国人部の教員一覧（1945年6月）
趙・徐・銭・胡・白・連は、学歴欄に示されているように、いずれも日本への留学経験をもつ。胡・白の名は35頁の『読売新聞』記事中にも出ている。なお、学校名は北京市私立崇貞女子初級中学校である。
（北京市档案館所蔵）

■満州礼服を着た羅先生
羅俊英は、魯迅の推薦で就任、1923年から45年まで崇貞の教員。同小学校長を歴任。
（『朝陽門外』グラビアより）

■国民政府主席 蒋介石宛の清水郁子の陳情書（1945年12月15日）
崇貞学園の存続を願っての嘆願書の一部。郁子は前私立崇貞小学校・女子初級中学校董事（理事）の肩書で文書を提出している。
（北京市档案館所蔵）